竺志船物語旁註　上冊

へ13
3551
1

門 へ13
號 3551
卷 1

織錦平春海先生遺稿

松屋源與清先生旁註

竺志船物語

千鍾房梓行

竺志船物語序

予少與平士觀友善士觀長於予二十歳矣因稱忘年交焉每相會講論經史商量詩文時或及治道得失人物臧否未曾知其精國學也後聞論者之言之其於國學傳賀茂真淵之說博洽精確有青藍之譽焉予悅吾友有此博雅之人矣旣而文

聞之。其於和歌。豐艶高妙。不愧古之作者。與橘千蔭。唱大雅於關東。風靡一時。聲名籍甚。後進之士。仰如山斗。予又悦吾友有此俊逸之人矣。既而又聞之。其於和文。爾雅巧麗。獨步于詞林之間。先其古人。後無來者。蓋今古一人也。予又大悦吾友有此一代之偉人矣。唯恨予於

國學。毫無知解。則予雖亦觀同于矮人觀場。隨人唱喋耳。雖然毛嬙西施。天下知其為姣麗之人矣。蘇秦張儀。天下知其為雄辯之士矣。莊周左史。天下知其為能文之人矣。顏淵曾子。天下知其為德行之士矣。與天下之人同其見。同其言。謂之公論。又謂之正議。然則予之

稱士觀。謂之公正。亦可矣。若夫惡
人之所好。人之所惡。啼人禍身者。古
人所戒。予亦不敢也。士觀沒數年。其
門人高田文儒刻其師所著芝志
舩物語者。向序於予。予閱之。是世
所謂物語者。而彼傳奇小說之類
耳。是豈足鑿士觀之蘊乎。鑑哉。
古人有言。嘗鼎一臠。全鼎可知也。

此編雖區之。亦足以窺文豪之錦
心繡腸。發為英花嚼麝之談矣。天
下之人自有眼識。又何假予之贊
乎。文儒敏俊好學。務尚該博。瀏
覽不倦。能奉其師說。又一時之
才人也。嗚呼士觀逝矣。人琴俱亡。
韓公有言。思李元賓而不見。見元
賓之所與者。則猶如元賓焉。予之

於文儒之筵。
文化甲戌仲春甲子友人吉田
偶貞加賀大田元貞才佐父撰
星池秦其馨書

眡帋鐫字

天下有壞奇之才。能狀壞奇之事。著
為壞奇之文。讀之可駭可哭可快可
笑可恨。至使人扼腕噴飯咄々不止。
作者之心非有七竅。目則横而鼻則
竪矣。忽出此神通力。抑亦可畏也。史
記以跌宕之筆。簸弄今古。自是絶世
伎倆。但曰事生文。事猶在彼。至水滸
則一片腔子捏出無限壞奇之事来。
文之與事。併而屬我。縱横變幻。鞭馳

造化。雖正稗不同。工夫将倍古之人
矣。我邦古不乏麗藻。而搆虗之
文別出新裁。才實足抗衡水滸者。唯
源氏物語一書為然。其文波瀾蕩漾。
雲騰山崩。筆底無復毫髮遺恨也。水
滸以後稗史小説殆将充棟。吾讀深
厭之。源氏以後物語草紙不下數家。
吾亦不肯觀。近與高田文儒通交。文
儒持笠志船物語者来示曰。是平春

海翁之遺文也。請一覧見序。余破格
讀之。恍然自失。歎藻之絢。此豈在源
氏之下乎。翁之在世。里居相接。然翁
蒲柳善病。余亦衣走食奔。相見太罕
矣。翁之於國學和歌。一時推為翹楚。
吾亦不意其行文之妙至於如斯也。
翁龍鍾一禿。對客如怯。而胸中所貯。
奇々怪々。殆不可端倪。人之可畏。果
然如此。初謂源氏以後。我邦無

奇書者。余之固執也。使余之固執立解者。文儒之賜也。今已拜賜。謹以奉還。甲戌暮春之初五山池桐孫題。

池永觀之書

比ふゝきふわれやすらふといひていせ物かたり
のこゝろをもちきこえける子孝になまよみし乃
あらみてもおのがちからたる中よこれつくし
舟の名おなじけるをみて以の形をもおよこの
とをひたりしに師の翁加ゝるをみてのちか
へらくこはかゝるめれんやうすなむその
たりをこのなかられ人の説よろこそきむよ
すさひあらねいえることゝもせさる
ふつさは以へともまさ拙つれ教よは

ことはとてやはらかにわかくさむすほひ
しをはくゝみにこひえて見しよ人わくは
みちあるをもやうそこに為つるさまにいふ字
なさけいのちのかうれ松やと以まれ
る竹そうの翁乃たとひとしいふへきならたく
詞のあやにまるはきはなくや姫よそも
にわひなれあきとやいそきしけるを恥
うつりして筆をさしおそれたることあるのぬ
こゝにありし花の山路よそ日く結くてらむえ

翁にいまたおほすにうなとゆうえを思へは
十とせ余りわすれむかしのこゝにふるむかしなる
こゝひ松のやれあまりたちそれとしてはるか
て梅よ慈春子ふむとそれ何のもれ師の翁
よにいつもそのかをはたひとしてたよいふ
のちをもらかへさせまうをよみやはゆる
あまりにもさし縁ことをさへたまへれひ
いそてもろきにちしうかれぬるもうひあしや
さる私の結字樣そのまゝなまくさみむまる

もつはに抄かいてしあやめとてそれむら
私にいましおしてもたるゝてたらけれ
いひて我なる法以てとらふとも知しるか
のや乃字方ヽ利のよにもたへなる手足さ
をは見すしつくめ得もたつへきこの
まやそけるぬ
文化十あまりひとゝせ三月
源光彪

歌よみの翁津の在方なまよつら
なそのるとは。よみのく人にはざえんする
るゝかゝんをまてそゝの中まさるのこらふ。
ほゝれ人は呉竹の世ゝ絶せず
漢のまゝとに教あまるなむなとこえ
たる。「志つのはあれど小理が於ゝ音
素のくすの性をさへてきうたをなす
守しへ子何とも世に居てゝもすとのく

名字はさき隷書などの職録とて大人にて。
青蓮院の尊純親王また宗とし
あまたの人これにならひしなど伝ふ
世にはまた六人の仙花尊円の。六
家の大夫とんのなるもおもむきれば他の方
平出まうさしたいでもよめいでも」べからず
みりく屋子より書を学び当代の人の
えんの及ぶ所なし字かくれ

しは。いかに熟して大人をもわたかる
の人」。そもしく文のまた漢字いは平振
神代より法ははまるるのにあらずして
さくらく漢文をもねむてこそはなはだ
法を守りてのみ人なるを学なれて
筆法と学などいひ好しる筆は
古身にひとつぼしして未だ手法の
ねよりばかりのさまをも字数し。

あるはなにくれつゝひまにて猶くだく
まぬまでほどのそばが守りし茂
さしもくるは、あまりにもそこばなつかしや」
先づ其上古の宣命祝詞まではあまりに
此體となすべきてあるこの詔勅璽書制
誥冊御札教文論祭文国書宮教符檄
露布写移判祭文祝文などいかなるゝもの
しかりつ理上書表牒奏疏書記論説

原議辯解釋問對序小序題跋書讀
雜著規戒箴碑文記志紀事題名
行状墓誌銘墓碑文墓碣文傳誄哀
文などはいふもさらなり。事記世継物語
などは左氏史漢のさまにならひたるなれ
竹取伊勢源氏物語などは
けずしも其用あれど、たゞ後の演
義小説はいとしもあらずかしけれど昔より治

拾遺などは戦国策説苑のたぐひをいへば
いふべし。その外何くれとかけるも體から
くさぐさありて、又はなえて伝なれ
けるとまでぞ文にしたるはすくなき漢
字はおほかる字。今にまされる詞を
いひ難きは挿てものすべきなる字ある
事。語など聞えしも人なる人をたゞ
けしきばえさせてあらへしと記され

そのむね字ほてすこし理ておぼつかなく
あやなしやかりそめにはよまずなむいひ
こしなりけり。これぞまことへ子ある
はいふべくもあらず。門弟なれどして
まなぶ者も見るにぞまなぶ人も
その光そひて。今は和語の字たで
形をしのおほし。句々罪れ草書体ぞ
読むに来れるは大人の教に気あれ

まことなれぞ。世々に往昔の詞が
まなびしらず。ゆゑをたもちまどう
たへあかす詠る」大人の世のみそら
あかける中に近くしめす手の撫きに
すゞろ、なる筆のあそびにも弁と源
氏のものがたりの中に濵菜や説の
さあるにやそれをしるして。ひとつの一の巻
をさめして撰らせのゞさはぐるおもねる

むまれひたぶる寛字不違ましぶこ。
そてなんはべしに非意なかれぞ。
余もひとつしてさ実が」の律詩
「つまのまるかせぬ詞字をえくはへてまさ
書きはせしなかけ程」文化十一年
二月。宮田なる序。

凡例

此書はもと大井ノ三位物語と名づけられしなるを
はくしあといへるハ一の巻の名なれどもつゐに
初と巻とさして捨られしそのなればやがてそれ
巻の名もそらはぶきにまとりなせしこと巻をれず恵
にそハ次の巻にこそとあまてしはからふの傳奇小
説の書例に且聽下回分解とあるによられしに
なんあるもけるに

はじめ巻端に笠志船物語東都平春海士觀遺稿源
與清文儒旁註と出つるをいへるより竹取宇津保
伊勢源氏などすべての物語ぶみ例なきことなれバ
世人の議論もいとかしこの海しかりなんさてハ與清が

そのころは、師の名をもはぶかれに似たりとて、ひ
きしらぬ人ありければ、せんかたなくてをぢきたりき。されど出
はやり出る人は西蕃(カラクニ)になくてことばなれば、今にはまよ
ひたりとも、なぞやといへる人もなかりしも、巻首に作
者の名あるを、せし例なきを、なほどやう後世になりて名
をかくせしは、またたえてなし。中國(ナカクニ)にもいとやさきふるさも
こそあらめ、今になりては作者の名残りにそこそこんどの
ほいなしといふべし。此の始まりさらにみよりんには、
序跋などくさぐさあるは、いつもさらに、ここまで記すにも
えうなければ、さらなる也。まきのまへにそつぐべきを、東
都といへるを、これはもとあづまにおはしまし人ありけば、一つまではいかにもこそ
ものなれど、ご物部某なるが出せる例を引きたるに、あしからずは、い

みな太宰府を西都といひ、鎌倉を東都といひし
例あるがうへに、国府(コフ)のあとをもみなの都(ミヤコ)ともいへめれば、
こゝにその證(アカシ)に據(ヨリ)しに、京都を西都とは書きまし
なれど、江戸を東都とかんかふるは、さるかたもあるなれば
しきよしは、まろが著せし俳諧歌論十の巻に論(ロウ)じ
たれば、こゝにはいはずなん。
余(マロ)が旁註(カタヘガキ)せし條に、なほあまたあらぬさへあまたは標註(カシラガキ)
をもくはへてんや、などいひそむるせし人ありし
かど、いとふるき世の書(フミ)にもあらず、まのあたり師の
ふでずさびなるものを、いとしもしげに標註ま
でやはとて、やみぬ。旁註だにもえうなきことなるに、似
たれど、そのふうびまなびのともがらなどにもと、ひがめて

んもあるまじきことなれバもちゐせしなり
書中にとりぬる字(モジ)をえらみもし削(ケヅリ)もせしハ世人の
いぶかしくおもひぬべくあるべし。たとへバあんな
よかんなといふ語(コトバ)ハあるなよかるなの音便なれバ。る
もじをはぶきてかなのみにかきてもじを添ざり。やごとなし
といふ語ハ無止事(ナシヤムコト)ともまた無悩(ナシナヤム)ともいへる舊説う
けたることなれど。余が考にて無上事(ナシヤゴト)の義とさだめたり。
さてハやごとなしの略(ツヅマリ)なることぞ。んめじえうな
きをまたなぶきこり。清水氏ハ不得已(ヤムヲエル)の義と
もいはれど是ぞくまろが説にてあらざりまた
おもしろきことをのしとくる語ハ。面向(オモムカシ)のかな
きたる奥(オク)のおもじあべきよし。本居氏ハいはしこの

といふ端(ハシ)のをもじ用(モチヒ)しは。蜻蛉(カゲロフ)日記のみちのくに
ちのおもしろてありしかバこのまにくしれその
かくましといふ哥に丘(ヲカ)によりけるをもて證(アカシ)と
せられし師説によるなり。

源與清識

はなし家
氏は藤原にて大井の三位といふ人いまそ
かりけり。身のざえ(才)はとこのしもうよ経けよ(賢)
おとり(劣)たることなかり(無)けり。楽しみたまひくらしバ年
まさ三十まてはたえぬほどなれは名誉乃
かくまて。宰相まさへなりすきバ。世のおぼ
えやごと(上事無)なく。ゆくすゑいとたのもしう人も
こゝろよせまゐらせしを。たゞひとつあやし(怪)
きやまひ(病)ありて。酒をこのみてつねに侍しが。

おほやけわたくしの事をいへば、やがてはらすゑ
たまひ、さけのみてきやうじ給ひをり
はうはしごゝろもあらはになりて、そのあらく
のまゝさらぬゐなかしきなり、人をもあらぬよし
なきことをいへ、おほくのことまでいひいでゝをさへ
給ひて後は、そのたゞんまさしれきはつかゝるまひ
なりなれやなど、笑へおもひする人もあれど、
さばかりかしこうおもしながら、わがのあや
まちともおもほさで、あしくあたまふべきは

んもなきさまぞうたてあるや。わがのき殿上人
などは、せうようはしきことゞもいひぐさ
にして、さけのみとさへ法けていひそやし
ぬ。まことろある人は、此人をしもうのきし
にたなるはかし。このはとてかしみあへり。
一とせ殿上の淵酔まいりてしひられて例
のうたしごともなく酔ひしれたまひ
て、ありとあれ上達部のかうぶりおとし
しき、きぬのすそ引このみぐりなどし給ひ

く経ぬれば、うへ(上)はきこしめして、むらい(無礼)をも
さのみとが(咎)のえたまはじきをりなれど、ゑひ(酔)
ひにのり(乗)たるわざとはいへど、ことのしな(階)
なきことをもあまりて、このくまでものぐるほ(物狂)
しきふるまひやあれば、いとやさしからぬ
ぬことなりとて、やがてしき(職)のさしとどめられ
たまひたまひぬ。それよりのちは、世にも中
あぢきなき(無情)ありさまにおぼしなりて、故大納
言のときより住まはせ給へるみさう(荘)なれ大井

にあるに、もとよりかりそめの住居などあるを、
つくりかへさせ給ひて、こもりゐ(籠居)おはしましぬ。世に
まじはりもたえてのちは、しづかにて、今にいたる(至)まであるさ
ひたから(寶)さこそといみじくもおぼえなし、
此方はみこのすぢ(王家統)どほりまで、やごとなききはにておはし
ませど、いとのなさけすくせ(宿世)のつたなくおはしまして、おとなし
さけに酒をしもこのみ給ひて、そのくるひおはしまし
さぶらひぬるおほくは、そのうへはまづいみじく(最)
をさなき(稚)おるほどにて、女ごをしすなはなり

給へり。此姫君かたち世にすぐれてあかぬふ
しなし。よろづにさとうおはして、はかりなくし
いでたまふこともきこえてんかしらひ人にはこと
なり。又君の御心おきてまめやかにおしたち
たる御ある御心ざしやうなれど、うるはしく女
しくおほとかにのみもてつけたまひて、さし
すぐいたるかたなのどふつゆ見えさせたまはず。父
君のあけくれさぐ酒にふちふしづみ入てこひ
ちのごとくにのみおはしますをあさはしうなげ

かなしきことにおもひつゞけたまひて、のちくかたで
このませなどよきものを、ひたぶるにやめたま
へとまでは侍らねど、あまりにおほつきてたゆる
またなうおぼさば、おもひぬ法病をもいそぎせ
ぬひぬ御し、ひ終日はようちおきぬらんを
こそからうじてさめて時のまぐにさめぬらん
をりあらましかばなど、いさめきこえまほしくも
あれど、あれさらなのたまひそ、むそのしくも
いのちのぶる薬なりとこそいひつれ。今は

世の中はまじはり（交）もうるさくおぼしなりて、
つれづれ（徒然）とものこゝろもみえわたるまゝばかりなるに
またのうまし、このばゝはなんゆくとも何となでいよいよ
さびしくしのゝましなど（寂々）、此方はかくうらより
いひくちつかまへぬ。父君えやはききいれんさるに
朝夕なるゝかれのことにつけても、いさゝかの情なく
ろまたがひし（不背）とおぼしめれば、あながち（強）にようう
ちのへしてはもどき（戻）ゆゑなるべくもあらじ。
かくて年月のゆくまゝに、よそぐ糟のをか（丘）つく

らんとて、そのいとなみ（営）に、しんでん（寝殿）のさうじ（障子）
まふ。かくてやまとの酒に名きこえたる人々を
あつめさせたまひて、おのおのそのすがたは世人々と
とはれたれば、我たち（立言）もとゝもに一のみ（居）かもとひ
の酒つくる術あるぞ。わが生涯（生涯）かめ（甕）のもとに
とのたまひて、いふ人のなかにも、大伴の大
納言、旅人卿ときこえたまひしは、その酒をほめる（讃）
歌をとめでたまはりて、その心をひろめて、
長歌ひとつをぞつくりいでたまふ。

いやしきのかうさく人のくらしやそて
せいしゆをひじりとハむべもいひけり
これをしも友としなせバ花をめで
月をとぶらふもあはれさのそへるおもひハ
うきことふかくしげきはまづ一つきんと
まよふりあそバおのづからんゆるけし
またさらに二つき三つきなづみなく
のみて後ハむすぼるるおもひもとけぬ
ふさがりしむねもはるけぬうちとけて

十つき七ほきみずきこそなりけりとききて
あめつちもわれから廣く月日も
のどかなりきのふといひけふといひつ
ひるよるなくゑひよゑひてくされ月の
土さへさけててる日にもあつさ思ハず
雪こほりあられふるとも冬の夜も
さむさうすれつかくぞこのミいとまもてとし
ひじりともひじりといひてあふがざらめや
むかしたのおとどハ年おいてまひぬればちし

乃へうたてまつらんの清こゝろまでよろづ
此まつりごとも表奉政をさしまうしたまはゞ凡申
ぞ痛よこゝのせそこもりてのとおはすれば託
今ハ世乃中のるいぞ右乃おとゞの清こゝろまゝ
なり此おとゞいとうとのうおはしなる時ハ自由之
位の君とおなじ師をとりならひてふミなど若書
よミならふこともかならずともにへだてなきもの諸共無隔心
なひぬれば、いとうるはしき清中らひなるを好
とハ清身此さきのえなき人あくあつまるよ栄

清けてもこの君のかく世ようづもれきてのミおハ埋
するをいといとほしうおぼしなげきそてことよ
ふれてハおほよそのめゆえ隠をそりもいの禮ど依労約事
年ごろかく身を世になきものになし侍れ
バ世にハん安きこゝろ思ひなり侍りて今ハ
あるをとうらやむこゝろも侍らばなどいひあひ
てすゞしうも清んかしづひぬるぬをとし清々誉
つらし此そちかけられバいとので此君をとおぼ太宰帥關
して清門よハつまれよきさまそうし侍らん奏

はとしも今さかりなるをばひらづるは世をと
おもひすてしまふことはゆめ〳〵あるまじ 切
きこえとてあそびくるしら人笑えのすべ一さ 說
び二たびこそあらめむかしそらまされぬはん
よりかくせちよのすまひするをば人のはて 切
ろをもおもはずこのほどはおもはんものをたてん 顔 立
ハこのうりてんあさきわざこそましてをのこ世は 浅 男子
あらんよおのれをしる人あらざらんそうこそ
よもぎふのもとはむなしくくちもはてめこそ
蓬蒿 下 空 朽 果 志

ざしをもたてゝ身をもおこしつべきはあはれなる 立 起
をいつのでいへばよるべきかたは今はおくぐ
のはんはそむのじとのゑばかく世ぞなれける
宮これうちはさびしくあはれくらさん 寂々
よりは花やかなる世をへて、にぎはしき月日 賑
をおくりむかへんこそいふかひあることばは
侍らめとて少方もよろこびすまひてうちく
よそはんまうけなどかするを姫君はひとるを
はんゆめのぬやうにぞおぼえあるさるは位暮し

都をふりすてゝちさと(千里)のほかにあくがの(浮宮)うきみやん
ことをんぼそくおぼえめやとてさぶらひ
なぐさめあへば、こゝろづくし(筑紫)の海ハなさけなり
とも、はあかりなきずともあはれしてまつ
らんは、ゆかうき(憂)さるゝは侍らん(伴)、まさ時いくりて
清身は世にまかるのみハ、御もしねがひ(願)
きよすぢにて、いと(最)うれ(嬉)しきものゝからずひと
つやきそうらん、おもひあへらるゝことは侍る(作)を、ゆえで
ハえあるまじけれど、いひいでんもさはがしくて、

んのうちにみちなん、おもひつゞけ侍るとて
なみだ(淚)ぐゝみ(含)のさいへいとのなきつゝなみだとも、
なかのほとをあやぶみべきこのつるゝすれなじめは、
物おもひしげまなさまこそゆゝ(忌々)しけれと
のたまへバ、女の身にてかゝるすれがたはし(端)ハ
てもまねび出んハ、かたいいときゝしかれば侍れ
ど、つきゝりたえまゐらすべし、そもこのたび(此度)
の清はたまふ、おほくのずりやう(受領)れ、思ひて(早)
るせちの(職)きしぐひ(別)とこそとて、つのさ(諸官)くのこのと(上)
(挨)

まつりあひてよろづのとりふさね(執總)あらん
ましておほくの人ぐぞ一下にこそなびき(麾)なま
るべきを酒よりのことはんよせあらでぞかうへ(表)
まはそむきまゐらせずとも下にはいそ(將)この(傘)
でこのよく(克)したがひ(從)まゐらすべき志のはんにて、
ゆくりなく(不意)はかれとどめおひあるべきつ
もいでまうでこそや備るべき(貿)文氏としはる西
れ海波風立けのなるにとりいふなるぞとく
何ぞんばすまに例のこひぢ(泥)のやうにもおぢさば(車)

いかでしあらんぞよりかくははまにこそとどめ(淫止)
たまへとぞあしとめえしとどめたまはざらん
まかば此ばはつかさ(職)じし(辞)あそぞうし給やまききこえば
まゐらすべきがいしこさき波路としのぎ(凌)ほひて、
はんいとまなき(無暇)世をおくるしあらんよりは春には
山の雪をとばり(帳)とし、秋はさがの(嵯峨)の錦をしき(茵)
とねまて露をくみ(汲)露にゑひ(醉)あらんこそはか
こころゆくこのさなれとて、おしうちそのあや
をば父君きこしめひて、いとこのしこうものあひ

そりぬされどおとこは此はんさとも今なをさき
がらくなん、又このくは此すさまじ、わがのこゝろよ
こゝそあきまさ、さればこそ深くなんおきなひそと
て、思ひとゞまり給ふべくもあらざれ、さるを
なりてとくまこの勝とのせんじ下さぬれば、
先おのりまうしまとて、右のおとこのはかと
はまゐり給ふ、おとこはまちうけまゐらせて、
ありのひての人おきそてなど、ねんごろに
笑えなりて、又むそのしれこともかきくづし

十

おぼしいそぎ、かたみになきわらひ、よもすがら
一夜酒くみかはしつゝ、ほそのこゝろあり、そち
此君が姫君のなさえおひしことはけんにかたき
わざましてかしこまりおきなかは、こゝろさん
ねきバ、例のやうにまちあひながら、おとゞハのねて
はこる、ましまうけありて、ゑひて、そちは君に名高き
帯とかしこきはるさて、小方によりてあやも
もく、姫君は此はなれゆきとていときよらなる
此そ一くさりわたの君は此はなれうをさんよこまや

このよんしてなりたまひて、わらハ（童）下づかへ（下人）のひなど
までよろこびどもあまたかづけ（纏頭）など、あそのつきさまに
たまはりたまひぬ。おとゞ（大臣）年比のほい（本意）かなへりとて
よろこびたまひて、よべ（昨夜）ハこゝろみ（試）にしひ（強）たりし
ご、おもひて此後もうとくてあるさまはゆめもあらぬ
を、酒鬼といひて、世の人もあさましうとり
なすこそ、物いひさがな（悪）きわざなれ。昔ハさも
ことやう（別様）にてありつらめ、今ハあらぬならひ
ぬめれバ、こゝろやすしとぞのたまひける。

身ごとは秋のさがの野の花見にいでたち（出立）
まへど、かうしハくだりたまはん（下向）のはいそぎさまま
ぎれておぼしもたゝぬを、まことのへりなんは
どもあるこの秋わたこれ秋ざまとて小車
そでのしたへ（撩）バ、姫君ともつらね（連）て、ひと川
清車にていでたまへり。夕かげのさきほど（可憐）
までさがの花ども、れ露にうちこぼれ
たるなど、墨くすやこまひとてかりつまふ。
法師めして、萩の花一枝をもたせたまひて、

そちの君。
まことはまん秋まちぎりしこゝろしげき
たまとまほりせ萩が花づま、を花の風に
なびくをみるにつけて、心のうち、
初を花なるは、ねくらん秋のつまとや
まねくべきかわがみなしめや、女郎花のさ
つまさけるを、姫君。
秋の空のちくさは、なかのをそみなくし
やさしいそので、ひとりさうらん、このしも

むしのねなどきゝて、くれのこるはて
おもき、年ごろ小方のぐわんたてゝあひぬれ
お法佛にそもわたの礼つげまうさんとてまひ
また法輪にまうでゝ法堂にこもりのまゝ、秋
なかのもるころかさば、しもろともまうちは
どうきまへば、師の君は法ゆめに父大納言
の物うきおりしげあるさまにてみえ給ひき、
などてさはおもするぞとゆひたまへど、なかの
法いくも物し、法にもさまへる事して。

法然これしらずもれのきゝたまふと、なかな
らんとて人なへば、
あら汝はこゝろゆるしすれ大舟はま(左右)
この楫にふりともなほさのむべきことあり、こ
たびふたゝび法におもむきたまふとするを法
然そくなるんとてのかなたなるんとおぼして、
法然やまふれとめでまゐらんとす。然ば後夜の
この稀うちなるにおどろきふと法めさめぬ、
如方はもかくとつげたまひて、もろともに法

師をねんじのたまふあけぬれば、法師等に
物などこの纏頭(かづけ)たまひて、誦経(ずきやう)ねんごろにせ
させたまへり。八月法いさちの日、山陵まで出
さちなふくるま十なのりてよく、法よそ(粧)
ほひいとゞいかめし(嚴)、おくりれんさには、はる
ものゝかづけたまひてなんくへしのひたる。右の
おくりよりも法使ありがかりそめれゆき(行通)ひ
おとなおもふ物ゝ、すぎいなん日とせ五とを
(路)数ハ、今よりまちどほく(待遠)こそおもひなく

られし。こ社ハやしろの神まうでゝ、白の
絹のみてぐらを捧げて祝ことを奉る、
ぬさしろ(幣代)までの清らかなるべし。
大かた波ぐち潟こぎわたりなまゆめのん日あ
八重の汐路はるかむけよくせよとまゐるものぞと
あるま、
つくしの海ふなで(舟著)してなにぞ(為)先つげん
やく乃汐路ハながきのなかりとも、をしき(惜)もの
にそとて、行ゆく末のことどもたのみ申すなり

ことこまやかなり、使に酒などもひてきぬ
このほどげなくて、播磨守ハそれより清くぞりま
ちうけて、あるじ(饗)のまうくることいといみじ(甚)。舟
日ごろふりて舟いづるにべくもあらねば此月
ものさわがしく(喤)やすらひぬひて清んさけて(静)まで下く
だりなりぬ、晴まちつけぬひて名立てる浦
の月をもみんとて、やいるらせんとそ日く
まなれくれと、海山のあれどもとりはど(聚)く
て、清酒すゝめまゐらに、師(味)の君ハ姫君の法

いさめ（諫）をもすれどもかならず又むつましきよしみの人でなく
ゑひ（酔）のあやまちしるべくもあらばとてされ
おとゞれよろこびのさまひかゞるすがたも（洩）そゞろさく
なく猥ぞかくよはんつゝましう（憚）て一日ふつ
このほどはゑひしれ（酔痴）なふかりはのをなかぬを、
つれ〴〵（連々）とふりくらして（雨降）、なごのめがちよはを
日々とこそさもなくば、おのばうはんおこたりざる
なるよ、かしこまくぞりおひてこそ（懈）よろづれ
おほやけ（公事）どもそへくらめ。説話のほどよは、さの

こはゞかりまじう（憚）おもふべきことなれ。さればはゞ
ろなぐさあなよげのりは、なにのさまたげ（妨）か侍る
るべきとて、少方のまづゑひなくば、いつしかと
けだいゆるび（懈）きて、今は日ごとにまひおぼれやうよ
のこゞぞおそろしくなる。はくつしまもあらくこそよそあち
のくぜりおふとききて、それもしかしこま（新典）（帥）
まてまちきこゆるよ、ましてたれおとゞの光（威）
さへそひおひぬれど、人これおもへることおほり
さなりば、こゝろびは舟話よろしと笑て、例なき

事なれど、げんこのかとよりことにはなはだ
こゝの舟まはしは、かぢとり舟人どもゝ、物よ
ころねさるこのぎりをえてふなやかた
など、ぎろうあらしれ帳びやうぶなどまで
きよらかにてうじてととのへ、なまじひよき清
おくりまはしける舟どもおほく、おれどもなぎさは
まはなかてて清舟出などで待さる、なみやうく
たれまあれば、此ひまにこそ清舟とく出させ
せなんめ、此月も海のこゝろさだめなう侍り

ばゆうひめらば、あからしまかぜたゝなど吹いで侍
らんもはかりがたしとて、難波の舟人どもせち
にまうせば、こちらの君きこしめひて、かくていつまで
も居て侍るとも、清かられのおもしろきは
かぎりも侍らじ、舟人らもいそぎ侍るとき
けば、今はまかりくだり侍らましとのたまへば、
我もとさありたきなれど、あやしきやさしひ語
ひて、さやけき湖辺の月とも清らんせられし
んこそきこようあることば侍るめる、ふたなので

いそぎ侍るに舟人のつねにて侍ればさはさ
清んなおくせなひそこのみつからの舟人こそ、
とほくことなりともゆきかよひ侍れば西風
のかぜもよくうけのでひなれて侍るべし、かれ
らがおもふところをもとひこゝろみ侍らんとて、
守護業の舟人をよびて、そのおもむきとし
おげまなまへの浦人のいひ侍るごとく、皆月
は西風さだめなう侍るめれば、されば舟
出しかんはことわりなるやうまへ侍れど、